

終助詞「よ」「ね」の音調について

—日本語音声教育の視点から—

轟木靖子・山下直子

1. はじめに

日本で生活する留学生にとって、日々の生活での周囲の日本人とのコミュニケーションは重要である。日本語の話し言葉においては、文末表現やそれともなう音調が大きな役割を果たしているが、なかでも終助詞は、それともなう音調により意味が変わる場合があり、上級日本語学習者であっても、終助詞の音調を使い分けた会話は難しいように思われる。その理由として考えられるのは、教師も学習者も、終助詞の形態と音調と意味の関係を体系的に学ぶ機会がほとんどないことがあげられる。

終助詞は国語学・日本語学において以前から扱われてきた歴史があるが、それは主として標準語を対象にしたものとなる。しかし、実際の話し言葉で使われる終助詞は、その話し手や地域の方言で使われている文末にあらわれる終助詞類の音調の影響を受けており、教師が学習者の発話を聞いて、終助詞の音調の不自然さを感じても、教師がイメージとして想定している標準語の終助詞の音調を念頭に指導することになる。

日本語教育の現場では、終助詞の音調についての指導は、単音の指導ほどではないにしても、重要だと考えている教師は少なくないようであるが、実際に授業で継続的に指導する機会は極めて少ないといえる(轟木・山下(2009))。それは、終助詞の形態と音調と機能の対応についての整理が不十分であることに起因していると考えられる。日本語教育においては、全国どこでも同じように通じる、終助詞の形態と音調と機能の対応を明らかにすることが必要である。

轟木・山下(2008)では、東京、大阪、岡山、香川での聞き取り調査をもとに、日本語教育で提示すべき終助詞の形態と音調と機能の対応について一つの目安を提案し、轟木(2008)では、内省に基づき、東京語の終助詞の音調と機能について音韻的に整理をおこなった。

本研究は、過去の調査及び香川大学に在籍する岡山・香川で生育した日本語母語話者の学生と韓国語および中国語を母語とする日本語学習者におこなった聞き取り調査の結果をもとに、とくに終助詞「よ」「ね」を取り上げ、日本語教育で重点的に指導すべきポイントについて分析・考察するものである。

轟木 靖子 香川大学教育学部国際理解教育講座

山下 直子 香川大学教育学部国際理解教育講座

2. 用語の定義

2.1 標準語と共通語

標準語とは、『国語学大辞典』によると、「一国の、規範となる言語として正式に制定されたもの。一国の言語で、広く、統一的に、公文書・印刷物・演説・講義などで用いられる、正式の「いい」言語で、くずれた発音や文法、俗な、または地方的な単語、あるいは間違っただけの使い方、さらに、人の品位を疑わせるようなことばづかいを人為的にとり除いたもの」であり、共通語とは、「言語を異にする集団間に共通する第三の言語。(中略) 集団が一言語内の地域社会である場合は、いわば「国内共通語」というべきものである。」とあり、現実の日本語におきかえた場合、標準語とは、主として東京の言葉を基礎に、「理想的な言葉」として想定されるものであるのに対し、共通語とは、日本全国どこでも通じる言葉で実際のコミュニケーションの場にあられるものであるといえる。

本研究では、終助詞の音調について、全国どこでも日本語母語話者の理解が共有できれば、それは共通語としての終助詞の音調であるという考え方で進めており、日本語教育における音声教育に積極的に取り入れることを提案するものである。

2.2 アクセント、イントネーション、音調

アクセントとは、「個々の語句について、社会的慣習として定まっている相対的な際立たしさの配置」(『国語学大辞典』)である。日本語のアクセントは、語あるいは句に対して高い拍と低い拍がどのように並んでいるか、あるいはアクセント核と呼ばれる音の下降(方言によっては上昇)がどの位置にあるか、あるいは無いかによって主に記述される。

これに対し、イントネーションとは、研究者によって考え方が異なることもあり、音の高さの時間的変化全般をさす場合から、とくに文末のみに限って使われる場合もあるようである。

本研究では、一つの語(句)の音の高さの時間的変化を音調と呼び、具体的には、終助詞がどのように音声的に実現されているかに着目する。文全体の音の変化について言及する際にはイントネーションと呼ぶことにする。

3. 終助詞の音調について

終助詞の音調は、前接の語の最終拍に対する接続の仕方と終助詞の拍内音調の組み合わせによって終助詞の音調を記述することができる。

前接の語の最終拍に対する接続の仕方を区別するのは、例えば同じ上昇音調であっても、「行くね」(念押し)と「行くの」(質問)を比べたとき、「ね」は前接の高い拍「く」にそのままの高さでついて上昇するのに対し、「の」は前接の高い拍「く」に対して低く接続する、というような違いがあるからである。前者を順接、後者を低接と呼ぶが、このもとになっているのは、和田(1969)の助辞接辞のアクセントの概念である。前接の語が無核(平板型)の場合は、サ「クラヨ(順接)とサ「クラ」ヨ(低接)のように、音声的に違いが明確になるが、有核(頭高型、中高型、尾高型)の場合は、アクセント型に従って接続しても低い拍になるので、音声的には順接と低接の区別は明確ではなくなる(カ「ラスヨ、タ「マ」ゴヨ、ヒ「カリ」ヨ)。

したがって、たとえば「雨だよ」をア「メダヨと発話した場合の「よ」は、順接か低接か区別がつかず、これを確かめるためには、同じ機能を持つ「よ」が「風だよ」という発話でカ「ゼダヨとなるかカ「ゼダ」ヨとなるかを見なければならぬ。

拍内音調については、聴覚的に上昇も下降もしない平坦、上昇、下降、上昇下降の4種類のほか、上昇については、音声的特徴から、疑問上昇とアクセント上昇の2種類を考える(注1)。た

例えば、「帰るの?」と尋ねる発話の末尾は疑問上昇、「帰るって言ったら帰るんだ!」と主張する「帰るの!」の末尾はアクセント上昇である。アクセント上昇は、疑問上昇に比べると、音声的に上昇の開始点が早く、全体の長さも短い。

以上から、順接および低接のそれぞれについて、平坦、疑問上昇、アクセント上昇、下降、上昇下降の5種類を想定することにより、理論上は10種類の音調が可能となる。しかし、すべての終助詞がこの10種類を取るわけではない。なかでも、低接・下降は、低接・平坦のバリエーションと考えるほうが自然である。「やるね」を例に10種類の音調を図1から図4に示す。音調曲線の抽出には音声分析ソフト「音声録聞見」(デitel)を使用した。

なお、今回とくに取り上げる「よ」「ね」については、「よ」は疑問上昇とアクセント上昇を使うことによって表現される意味・機能に大きな差はないと考えられ、典型的な音調は疑問上昇であるため、「よ」については疑問上昇とアクセント上昇を区別せずに「上昇」と呼ぶ。「ね」については、聞き手からの回答を求める発話では疑問上昇が、伝達や念押しのような発話では、アクセント上昇が用いられるというように使い分けがあると考えられるため、「ね」についてはこの二つの音調を区別して扱う(轟木(2008))。記号については以下のとおりである((注2))。

低い拍から高い拍への上昇	「
高い拍から低い拍への下降	」
疑問上昇	↗
アクセント上昇	↑
下降	↓
上昇下降	↑↓

轟木・山下(2008)では、日本語母語話者への聞き取り調査の結果から、日本語教育で指導すべき終助詞の音調を表1のように提案した。今回の聞き取り調査では、「よ」「ね」について、とくに表中の◎の音調に着目し、日本語学習者がどの程度理解しているかを日本語母語話者と比較した(表1)。

表1 終助詞の意味と音調の対応

終助詞 の形態	意 味 ・ 機 能		順 接					低 接				
	中心となる用法	聞き手の有無	平 坦	疑 上 昇	ア 上 昇	下 降	上 下	平 坦	疑 上 昇	ア 上 昇	下 降	上 下
よ	1	聞き手への伝達 有		◎								
	2	聞き手への反発の表明 有						◎				
ね	1	聞き手からの回答を求める 有		◎								
	2	聞き手への伝達 有	◎	○								
	3	話し手の感情表出 有, ただし話し手の感情表出が主	○		○	◎	○*					
な	1	ね1の男性語的な用法 有		◎								
	2	感情表出 どちらも可				◎	○*					
か	1	聞き手への問いかけ 有		◎					◎**			
	2	認知表明, 反問など 有, 聞き手がいても重要ではない	◎					◎**				

*聞き手がいる場合

**動詞終止形の場合

轟木・山下(2008)より

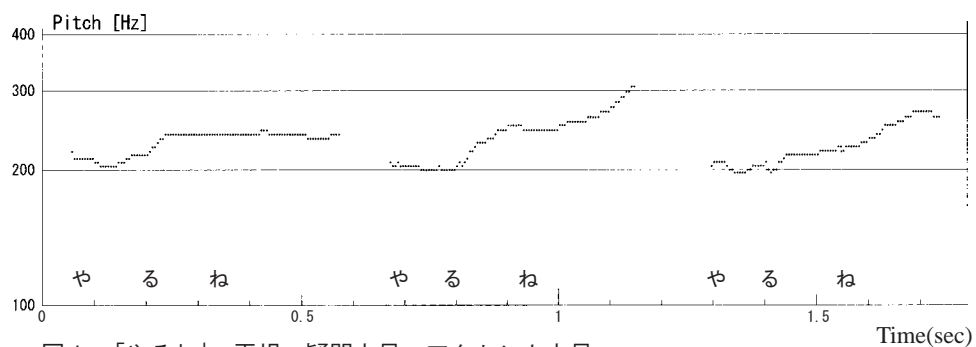


図1 「やるね」 平坦、疑問上昇、アクセント上昇

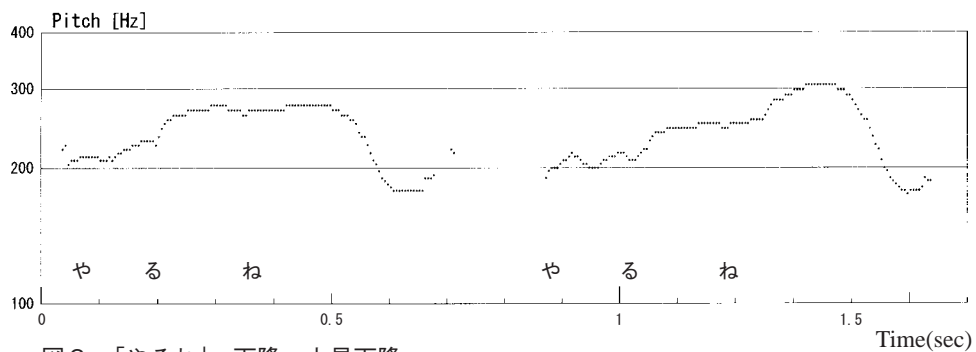


図2 「やるね」 下降、上昇下降

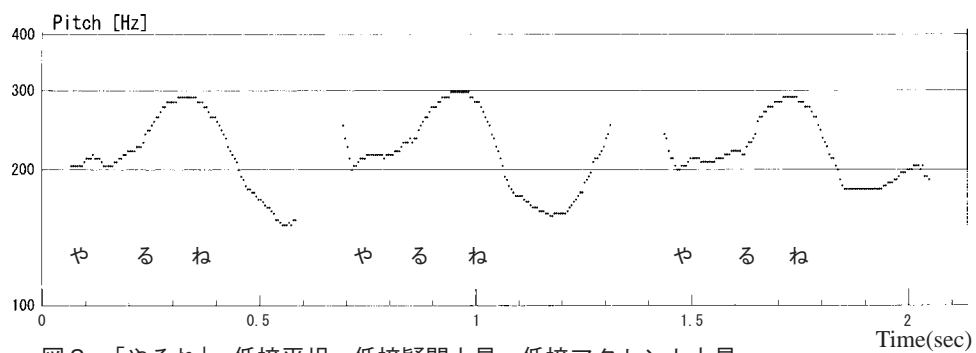


図3 「やるね」 低接平坦、低接疑問上昇、低接アクセント上昇

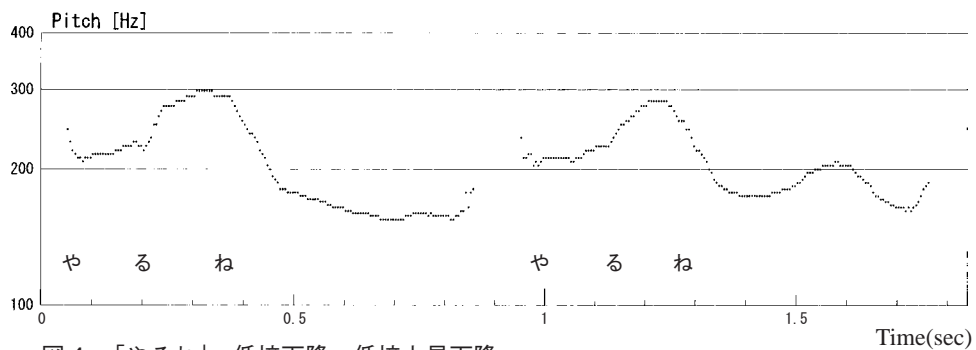


図4 「やるね」 低接下降、低接上昇下降

4. 終助詞の音調の聞き取り調査

4.1 調査の概要

「やるね」「桃だよ」のように、短い語句に「よ」「ね」をつけた文の終助詞の部分を複数の音調で読んだCDを聞いてもらい（不自然にならない程度に前接の語句の部分の音調の高さがあまり変わらないよう注意して読んだものを用いた）、各発話について、提示された設定での発話としてふさわしいと思ったら○をつけてもらった。その場合、自分が使わなくてもそのように聞こえれば○をつけ、複数○をつけても、あるいは一つも○がつかなくてもかまわないことを伝えた。調査時間は15分程度であった（注3）。被調査者は日本語母語話者27名、上級日本語学習者13名（注4）である。被調査者の内訳を表2に示す。

表2 被調査者（人）

日本語母語話者（27人）			
生育地：岡山		生育地：香川	
男性	女性	男性	女性
1	15	1	10
日本語学習者（13人）			
韓国語母語話者		中国語母語話者	
男性	女性	男性	女性
2	5	5	1

フェイスシートには、日本語母語話者には年齢と居住歴を、留学生には国籍、性別、日本語学習歴、日本滞在歴、日本語能力試験の点数を書いてもらい、終助詞の音調について学んだことがあるか等についても尋ねた。また、調査終了後、きちんと答えられたと思うかについても尋ねた。

4.2 調査の内容

調査した文、終助詞の音調、設定の内容は以下のとおりである。Lは低接をあらわし、Lがついていないものは順接であることをあらわす。疑上は疑問上昇、ア上はアクセント上昇をあらわす。調査CDでの順序はここに示したとおりではない。

(1) 「桃だよ」

- ① 桃の花が咲いているのを見つけて、いっしょにいる友人に教えるとき
- ② 「あれ、梅？」と聞かれて、「梅じゃなくて桃だよ」と言うとき

モ「モダヨ（平坦）、モ「モダ^ノヨ（疑上）、モ「モダヨ↓（下降）、モ「モダ^ノヨ（L平坦）

(2) 「やるよ」

- ① 「誰かこの荷物運んでくれる？」と、言われて、自分がやるつもりで「やるよ」と言うとき
- ② 時間が来てもゆっくりしている仕事仲間に、「早くやろう」と言うつもりで言うとき
- ③ 「早くしろ」と何度も言われて「うるさいなあ、ちゃんとやるよ」と言うとき

ヤ「ルヨ (平坦)、ヤ「ルノヨ (疑上)、ヤ「ルヨ↓ (下降)、ヤ「ル」ヨ (L平坦)、

(3) 「本当だね」

- ①相手の話を聞いて、「今の話、本当だね」と確認するとき
- ②相手の話を聞いて、「たしかにそのとおりだ。本当だね」と自分も賛成するとき

ホ「ントウダネ (平坦)、ホ「ントウダノネ (疑上)、ホ「ントウダ↑ネ (ア上)、
ホ「ントウダネ↓ (下降)、ホ「ントウダ」ネ (L平坦)

(4) 「やるね」

- ①一つの絵を3人で描いて、「私がここをやるね (=この部分に色を塗るね)」と言うとき
- ②太郎が100点を取ったと聞いて、「太郎、なかなかやるね」と感心して言うとき

ヤ「ルネ (平坦)、ヤ「ルノネ (疑上)、ヤ「ル↑ネ (ア上)、ヤ「ルネ↓ (下降)、
ヤ「ル」ネ (L平坦)

4.3 調査結果

聞き取り調査の結果を表3-1から表3-4に示す。表中の数字は、提示された設定で各音調に○をつけた回答者の人数及び同じ生育地出身者あるいは母語話者に占める比率(%)をあらわす。(表3-1～表3-4)

表3-1 桃だよ

		桃だよ①				桃だよ②			
		教える				梅じゃなくて桃だ			
		平坦	疑上	下降	L平坦	平坦	疑上	下降	L平坦
母語話者 (27人)	岡山 (16人)	12人 75.0%	14人 87.5%	0人 0%	1人 6.3%	7人 43.8%	11人 68.8%	7人 43.8%	15人 93.8%
	香川 (11人)	7人 63.6%	6人 54.5%	1人 9.1%	1人 9.1%	6人 54.5%	9人 81.8%	6人 54.5%	10人 90.9%
学習者 (13人)	韓国 (7人)	4人 57.1%	7人 100.0%	0人 0%	0人 0%	2人 28.6%	4人 57.1%	1人 14.3%	6人 85.7%
	中国 (6人)	4人 66.7%	4人 66.7%	2人 33.3%	2人 33.3%	1人 16.7%	3人 50.0%	2人 33.3%	5人 83.3%

終助詞「よ」「ね」の音調について

表3-2 やるよ

		やるよ①				やるよ②				やるよ③			
		自分がやる				早くやろう				うるさいなあ			
		平坦	疑上	下降	L平坦	平坦	疑上	下降	L平坦	平坦	疑上	下降	L平坦
母語話者 (27人)	岡山(16人)	14人 87.5%	13人 81.3%	2人 12.5%	10人 62.5%	13人 81.3%	7人 43.8%	1人 6.3%	5人 31.3%	2人 12.5%	2人 12.5%	14人 87.5%	10人 62.5%
	香川(11人)	9人 81.8%	8人 72.7%	0人 0%	7人 63.6%	10人 90.9%	8人 72.7%	1人 9.1%	2人 18.2%	1人 9.1%	2人 18.2%	8人 72.7%	10人 90.9%
学習者 (13人)	韓国(7人)	5人 71.4%	4人 57.1%	0人 0%	2人 28.6%	1人 14.3%	0人 0%	4人 57.1%	2人 28.6%	3人 42.9%	4人 57.1%	1人 14.3%	4人 57.1%
	中国(6人)	0人 0%	4人 66.7%	0人 0%	4人 66.7%	0人 0%	1人 16.7%	2人 33.3%	3人 50.0%	0人 0%	0人 0%	1人 16.7%	6人 100.0%

表3-3 本当だね

		本当だね①					本当だね②				
		確認する					賛成する				
		平坦	疑上	ア上	下降	L平坦	平坦	疑上	ア上	下降	L平坦
母語話者 (27人)	岡山(16人)	5人 31.3%	16人 100.0%	1人 6.3%	2人 12.5%	2人 12.5%	11人 68.8%	0人 0%	13人 81.3%	14人 87.5%	1人 6.3%
	香川(11人)	4人 36.4%	11人 100.0%	0人 0%	1人 9.1%	1人 9.1%	4人 36.4%	1人 9.1%	8人 72.7%	7人 63.6%	0人 0%
学習者 (13人)	韓国(7人)	2人 28.6%	7人 100.0%	4人 57.1%	4人 57.1%	1人 14.3%	2人 28.6%	0人 0%	5人 71.4%	0人 0%	2人 28.6%
	中国(6人)	1人 16.7%	4人 66.7%	2人 33.3%	1人 16.7%	2人 33.3%	3人 50.0%	0人 0%	5人 83.3%	2人 33.3%	0人 0%

表3-4 やるね

		やるね①					やるね②				
		私がやる					なかなかやるね				
		平坦	疑上	ア上	下降	L平坦	平坦	疑上	ア上	下降	L平坦
母語話者 (27人)	岡山(16人)	13人 81.3%	14人 87.5%	12人 75.0%	0人 0%	5人 31.3%	5人 31.3%	2人 12.5%	12人 75.0%	16人 100.0%	1人 6.3%
	香川(11人)	10人 90.9%	11人 100.0%	7人 63.6%	0人 0%	0人 0%	4人 36.4%	0人 0%	7人 63.6%	11人 100.0%	0人 0%
学習者 (13人)	韓国(7人)	6人 85.7%	5人 71.4%	1人 14.3%	2人 28.6%	1人 14.3%	0人 0%	1人 14.3%	7人 100.0%	7人 100.0%	1人 14.3%
	中国(6人)	4人 66.7%	4人 66.7%	0人 0%	2人 33.3%	1人 16.7%	0人 0%	2人 33.3%	3人 50.0%	4人 66.7%	2人 33.3%

4.4 調査結果の分析

4.4.1 「よ」

「桃だよ」を①桃の花を見つけて教えるときと②「あれは梅ではなくて桃だ」と言うときで比較した場合、日本語母語話者の場合①は平坦あるいは上昇(モ「モダヨ、モ「モダノヨ)、②は①の音調のほか低接・平坦のモ「モダ」ヨが多く選ばれる(轟木・山下(2008))。今回の調査でも、岡山及び香川で生育した日本語母語話者は②で9割以上の回答者が低接・平坦に○をつけていた。今回の調査では日本語学習者にも同様の傾向が見られ、韓国語母語話者、中国語母語話者いずれも②で低接・平坦のモ「モダ」ヨに○をつけた回答者が8割を超えた。

「やるよ」を①自分がやるつもりで言うときと②早くやろうとうながすつもりで言うときと③「うるさいなあ、ちゃんとやるよ」と言うときで比較した場合、①では中国語母語話者だけが平坦のヤ「ルヨを一人も選ばず、日本語母語話者と韓国語母語話者が7割から8割の回答者が○をつけるという結果になった。また、②のうながすつもりで言う「やるよ」は比較的留学生には理解されにくい音調と思われる(轟木・山下(2010a, b))が、今回もそれを裏付ける結果となった。日本語母語話者の場合、岡山・香川いずれも平坦のヤ「ルヨを8割以上の回答者が選んでいるが、日本語学習者は韓国1名、中国0名と非常に少なかった。また、③の「うるさいなあ、ちゃんとやるよ」では、日本語母語話者の場合、低接・平坦のヤ「ル」ヨ(香川90.9%)または下降のヤ「ルヨ↓ー(岡山87.5%)が選ばれており、中国語母語話者も全員が低接・平坦のヤ「ル」ヨに○をつけているが、韓国語母語話者はとくにどの音調が多いという傾向が見られず、ふさわしい音調がわからなかった回答者が多かったことが伺える。

今回の結果から、同じ「よ」であっても「名詞+だ」につく場合と動詞につく場合で日本語学習者にとっては理解しやすさに差があることが推察される。

4.4.2 「ね」

「本当だね」を①「今の話、本当だね」と確認するときと②「たしかにそのとおりだ。本当だね」と賛成するときで比較した場合、①では中国語母語話者以外の回答者は全員が疑問上昇のヤ「ルノネに○をつけていた。中国語母語話者は66.7%だが、6名中4名が選んでいるということから、極端に少ないとはいえない。②の賛成するときでは、アクセント上昇のホ「ントウダ↑ネを7割から8割の回答者が選んでいたが、日本語母語話者のうち岡山出身者は平坦のホ「ントウダネ、下降のホ「ントウダネ↓ーも多く選んでおり、とくに平坦については香川の36.4%とかなり異なる結果となった。同じ日本語母語話者でもこのように地域によって回答の傾向が異なる場合も見られる。

「やるね」を①「私がやるね」と言うときと②「太郎、なかなかやるね」と感心して言うときで比較した場合、①では日本語母語話者では平坦または疑問上昇のヤ「ルネ、ヤ「ルノネのほか、アクセント上昇のヤ「ル↑ネにも○をつけていたが、日本語学習者の場合、アクセント上昇に○をつけた回答者は韓国語母語話者1名、中国語母語話者0名と非常に少なかった。②の感心して言うときでは、下降のヤ「ルネ↓ーにほとんどの回答者が○をつけていたが、韓国語母語話者はアクセント上昇のヤ「ル↑ネも全員が選んでいた。本当だね①のアクセント上昇の結果(韓国57.1%、中国33.3%)とあわせて見ても、同じ音調であっても学習者の母語によって容認度に差があるようにも思われる。

5. 考察

終助詞の音調の指導を考える場合、日本語母語話者が(1)ほぼ間違いなく理解を共有しているもの、(2)かならず使うわけではないが許容できるもの、(3)ほとんど許容できないものに分けて

考え、指導の順序としては、まず(1)を教え、その後(3)について注意するよう指導し、ある程度定着した段階で(2)についてもコメントする、というような手順が望ましいと思われる。

今回日本語母語話者におこなった聞き取り調査は、「自分で使わなくてもそのように聞こえれば○をつける」ということで、最大公約数的な許容範囲を示す結果((1)+(2))として見るができる。指導上は、この中から重要なものを選ぶ必要がある。

また、「よ」「ね」の音調を考える場合、2種類の上昇調の使い分けについて、どの程度指導すべきかを考える必要がある。轟木(2008)、轟木・山下(2011, 2012)等これまでの調査結果から、「よ」は疑問上昇とアクセント上昇の区別の必要はない。ただし、話し方を指導する場合は、聞いた印象がやさしく聞こえる疑問上昇を主として、伝達の順接・上昇と聞き手への反発表明の低接・平坦という対立を明確に示すべきである。さらに、聞き手をうながすときに使われる「やるよ」の上昇(ヤ「ル」ヨ)や、聞き手への反発がこもった「やるよ」の低接・平坦(ヤ「ル」ヨ)や下降(ヤ「ル」ヨ↓)は「桃だよ」のような名詞述語文よりも理解されにくい可能性を視野に入れて例文を提示する必要があると思われる。

いっぽう、「ね」は「の」「か」などと同様、形態的意味において聞き手からの回答要求が含まれる終助詞であり、この場合、疑問上昇とアクセント上昇の使い分けが必要となることがある(轟木(2008))。今回の調査に当てはめると、「本当だね」は①確認するときは疑問上昇、②賛成するときはアクセント上昇、というように日本語母語話者の結果はきれいに分かれている。しかし、やるね①「私がやります」と言うときは、アクセント上昇よりもむしろ疑問上昇が多く日本語母語話者選ばれており、やはり述語が名詞(に属するもの)か動詞かによってある程度分けて考える必要があるように思われる。

6. まとめ及び今後の課題

終助詞「よ」「ね」の意味・機能に応じた音調の使い分けを明らかにするため、日本語母語話者(岡山、香川で生育した者)と日本語学習者(韓国、中国語母語話者)に聞き取り調査をおこなった。日本語学習者は被調査者を上級学習者に絞ったこともあり、比較的日本語母語話者と似たような回答傾向を示していたが、韓国語母語話者と中国語母語話者と異なるものもあり、また、同じ終助詞であっても名詞述語か動詞述語かによって回答の傾向が異なる様子も一部観察された。今後は、日本語母語話者の地域差だけでなく、留学生の母語別の傾向や述語の種類による差についても詳しく検討したうえで、教師にとっても学習者にとってもわかりやすい指導方法を考える必要がある。

謝辞

調査に御協力いただいた方々に深く感謝いたします。

付記

本研究は平成23-26年度科学研究費補助金による研究 基盤研究(C)「日本語音声教育における文末イントネーションの指導に関する研究」(課題番号25320632、研究代表者轟木靖子)による研究成果の一部である。

注

- 1 「疑問上昇」は郡(1990)による。上昇調の2種類の区別は、吉沢(1960)、川上(1963)を踏襲するものである。また、アクセント上昇は郡(1990)の強調上昇、郡(2003)の強調型上昇と同じであり、疑問上昇は郡(2003)の疑問型上昇と同じである。

- 2 これらの記号は、近畿音声言語研究会(2008)を参考としている。近畿音声言語研究会(2008)では、「はモーラ間の上昇,」はモーラ間の下降,とし、unicodeを使用した記号を用いている(unicode 02F9,02FA)。また、上昇下降も別の記号(unicode21B7)だが、パソコンの環境上の問題から本稿では用いていない。
- 3 調査は他に「桃か」「心配だな」等、「か」「な」についてもおこなったが、今回は「よ」「ね」の結果のみについて報告する。
- 4 日本語学習者は、日本滞在歴半年以上でN1または日本語能力試験1級合格に相当する能力を持つ者である。また、中国語母語話者のうち1名は台湾出身者である。

参考文献

- 近畿音声言語研究会(2008)「本号で使用する音調記号について」『音声言語VI』近畿音声言語研究会。
- 川上 泰(1963)「文末などの上昇調について」『国語研究』16号:25-46。
- 郡 史郎(1990)「大阪語の文末詞『か』の音調と機能:内省に基づく考察」『音声言語IV』近畿音声言語研究会, 1-25。
- 郡 史郎(2003)「イントネーション」『音声・音韻(朝倉日本語講座3)』朝倉書店, 109-131。
- 国語学会編(1995)『国語学大辞典 第九版』東京堂出版。
- 轟木靖子(2008)「東京語の終助詞の音調と機能の対応について -内省による考察-」『音声言語VI』近畿音声言語研究会, 5-28。
- 轟木靖子・山下直子(2008)「終助詞の音調における地域差と共通点 -東京・大阪・岡山・香川を例として-」『日本語教育』68-77。
- 轟木靖子・山下直子(2009)「日本語学習者に対する音声教育についての考え方 -教師への質問紙調査より-」『香川大学教育実践総合研究』第18号, 45-51。
- 轟木靖子・山下直子(2010a)「終助詞の音調と意味の対応について -アジア地域の留学生に対する聞き取り調査より-」『香川大学教育学部研究報告第I部』133号, 89-100。
- 轟木靖子・山下直子(2010b)「終助詞の音調と意味の対応について -中国語母語話者と韓国語母語話者を中心に-」『比較文化研究』No.94, 261-276。
- 轟木靖子・山下直子(2011)「共通語としての終助詞の音調について」日本語教育学会第8回日本語教育研究集会(四国地区)口頭発表資料(2011.11.19)
- 轟木靖子・山下直子(2012)「日本語教育における終助詞の音調の指導について -「よ」「ね」を中心に-」日本語日本文化教育研究会 口頭発表資料(2012.3.17)
- 吉沢典男(1960)「イントネーション」国立国語研究所『話し言葉の文型(1)』秀英出版, 249-288。
- 和田 實(1969)「辞のアクセント」『国語研究』29号, 1-20。